

「アメリカ医療の光と影」 医療過誤防止からマネジドケアまで

李 啓充 著

慶應義塾大学医学部助教授・病理診断部

向 井 万起男

私は、この本を貪るように読んだ。李啓充氏の著作なので読み始める前から予想はついていたことだが、読み終えて、つくづく凄い本だと思う。

氏の稀有な才能については、前作「市場原理に揺れるアメリカ医療」を読んだ方は先刻承知のことだろう。膨大な資料を収集・整理する才能、そうした資料から本質を掴み取る才能、そしてなんといっても、読者を引きずり込んで離さない驚くべき筆力。（ついでに言っておくと、大リーグ野球に詳しい氏の本には、アメリカ医療に関連させて大リーグ野球の挿話が登場するが、これが泣けてくるほどいい。“大リーグ野球に一番詳しい医師”という自負を持っている私としては、強力なライバル出現に脅威を感じているが。）

さて、前作と同様に、この本にも氏の才能はいかなく発揮されている。しかし、この本はある点で前作を凌いでいると思う。アメリカの医療について論じていながら、日本の医療が抱える問題点を読者に鋭く問いかけてくる迫力という点で。ピンピンと伝わってくる凄まじい迫力！ アメリカ医療の様々な問題が論じられているが、こうした迫力の点から言うと、なんといっても“医療過誤”を論じた前半が圧巻だ。

最近、日本では“医療過誤”のニュースが相次いでいる。かつてないほどに医療関係者に向けられる目は厳しい。しかし、同じような“医療過誤”が医療先進国のアメリカでも起こり、大問題となっている。投薬量の間違い、臓器取り違い手術などといった、われわれ日本人にとっても近

ごろ身近なものとなってしまった事例も起こっている。これは、考えてみれば当たり前のことだ。どこの国の人間だって、人間である以上、間違いは必ず犯すわけだから。でも、著者が実際の事例を詳細に書いてくれているのを読むと、あの医療先進国アメリカでもこんなことが起こっているのかと少しは驚くけれど。

しかし、心底驚くのは、ここから先だ。“医療過誤”が起こってしまったからの対処について。アメリカの病院の対処の仕方、医療界・国をあげての“医療過誤”再発防止への取り組み方を紹介しながら著者が展開する主張には、日本で医療に携わる者は驚きと新鮮な感動を覚えざるを得ないだろう。“誰が間違いを犯したではなく、なぜ間違いが起きたかが問われるべき”、“処罰されるという恐怖感から医療者を解き放った上で自己申告を促さなければならない”、“医療チームにおける“医師の指示は絶対”というカルチャーは医療過誤を産み出す”…。

“医療過誤”が起こってしまったとき、“個人の不注意を責めたり”、“われわれは同じ過ちを繰り返さないように、これからはいっそう気を引き締めて注意しましょう”という精神的再発防止策では何も解決しない、医療が十分な透明性と説明責任を伴わなければ人々の怒りを生む、というのが著者の姿勢だ。アメリカの“医療過誤”の歴史、事例を詳しく述べながら著者が突きつけてくる主張に読者は深く、激しく共感せざるを得ないはずだ。

ところで、誰しも知るように、世の中というのは、つまるところ、お

金で動いている。医療の問題だって、お金のことを抜きにした綺麗ごとだけを言っているわけにはいかない。医療におけるお金という問題は極めて重要だ。医療提供側にとっても、患者側にとっても。今、日本の健康保険制度は破綻を来すのではないかと心配していない人はいないだろう。この本の後半は、この“医療とお金”という切実な問題を扱っている。

日本とアメリカでは保険制度が異なる。しかし、“お金の問題”と“医療の質”を天秤にかけて、医療提供側と患者側の双方が納得できる方策を見出すためにアメリカが右往左往している様子を読んでいると、他人事とは思えなくなる。日本だって、同じ問題で右往左往する時期が目の前に来ているのだから。その時期に備えて、この本を読んでおくのはたいへん参考になる。アメリカの失敗や反省をわれわれはしないように済ますことができるかもしれないのだから。

“必読の書”と謳った本は眉唾モノというのが相場だ。しかし、この本は、医療に携わる人、医療に少しでも興味のある人にとって（ということになるか）本当に“必読の書”だ。私は自信を持って言う。この本だけは眉唾モノではないですよ、皆さん！

● 四六判 頁268 図1 写真25
表1 2000 定価（本体2,000円＋税） 送料実費

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)